

巻頭言

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00064214

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



巻頭言

越路びとの春待つ心は切実だ。陽光への期待は、冬のきびしさに応じて大きいからである。草庵に閑居した隠者たちの、春に寄せる思いも、同様に熱いものがあったであろう。

さて、わが金沢古典文学研究会が、『閑居友』の研究に着手してから、早くも三たびの冬を教えた。その間、国文学界における隠者文学の進展には、目を見はらせるものがあった。即ち、一昨年十月の説話文学会金沢大会のシンポジウム「隠者と説話文学」を発端に、昨年五月の中世文学会大会（於早稲田大学）のシンポジウムでも「鴨長明」をめぐる活発な討論が展開された。一方、『国語と国文学』では、一昨年四月に特集「中世知識人と文学」を企画し、長明・明恵・慶政などに対して、新展望がきりひられた。更に、昨年暮れに近い十一月、『群像』に「長明と兼好―孤独の位相の差異」について論じた座談会の記録が収載された。同じく十二月には、『国文学』も「隠者たち―脱出と漂泊」を特集し、隠者の論理や構造、隠者文学の諸相・方法など実に多彩な内容が、諸碩学によって論ぜられた。なお、説話文学会誌『説話文学研究』も、次号（第十号）は『発心集』特集とのことであり、また、本格的な『発心集』の注釈書が相ついて刊行されるのも、ま近いと聞く。如上の隠者文学研究の盛行は、まさに草庵に訪れた春だといっても、決して言いすぎではあるまい。

ここに、われわれも、従来の『閑居友』研究によって到達し得た足場を起点に、『発心集』に対して様々な観点から考察を加えて、『説話・物語論集』第三号を『発心集』特集として発刊することとなった。

金沢在住のわが同人は、これまでのささやかなグループ研究に対する、諸先学の暖かい御督促に勇気づけられて、今日まで歩みつつけて来た。今後も、春の曙光を求めて、一歩一歩進んでいきたいと念願している。従前にまさる御教示御支援を衷心よりお願い申しあげる次第である。

昭和五十年三月

金沢古典文学研究会 一同